

旧田中家  
鑄物民俗資料館  
(枚方市)

みゅ〜  
ザ・見遊じあむ

51

江戸時代の姿そのままの鑄物工場跡。屋根に溶解炉の熱を逃がすための風袋が取り付けられています



国内でただ一つ、江戸時代の姿のままに残る鑄物工場の博物館です。日本の伝統産業である鑄物技術の歴史を古代から近代にかけて紹介し、江戸時代の枚方の庶民の生活の様子も今に伝えています。田中家は古くから枚方の地で鑄物業を営んできた家です。江戸時代を通じて、近隣の人々が日常生活に使う鍋、釜や農具のほか、寺院の梵鐘などを鑄造しました。枚方市が田中家より、大阪府の指定文化財である鑄物工場と主屋の寄贈を受け、現在の地に移築復元し、全国でも珍しい鑄造関係の専門資料館として開館しました。



昭和期まで使用した、こしき炉(溶解炉)も展示

江戸時代の姿をそのまま残し  
鑄物の歴史を今に伝える

属を鑄型に流し込んで製品をつくる仕事。屋内が高温になるので、細長い建物の土塀には多数の格子戸を規則的に配置して、風通しを良くしています。瓦屋根の中央には、こしき炉(溶解炉)から出る熱気を逃がすために風袋を設けています。資料館には、昭和期まで使

用されていた大きなこしき炉も展示しており、当時の作業の様子がわかります。

ミュージアムメモ

▶所在地/枚方市藤阪天神町5番1号▶交通/JR学研都市線「藤阪」下車、徒歩7分▶開館時間/9時30分~17時(入館は16時30分まで)▶休館日/毎週月曜日(祝休日の場合は翌日)、年末年始(12月29日~1月4日)▶入館料/無料▶連絡先/072-858-4665

「ゼロの焦点」



松本清張の生誕100年  
傑作ミステリー再登場

12月21日は、日本のミステリーの巨匠・松本清張の生誕100年の日です。松本清張は日本の推理小説の分野に、犯罪の動機を重視した「社会派」というジャンルを確立しただけでなく、その後の探偵・推理小説および作家に多大な影響を与えました。1958年に発表した「点と線」以降、多くの作品がベストセラーになり、「清張ブーム」を引き起こしました。

年に、野村芳太郎監督で映画化されています。今回の再映画化では、3人の女性登場人物を際立たせているのが特徴です。失踪した夫の謎を追う鶴原禎子(広末涼子)、北陸の実業界の社長夫人・室田佐知子(中谷美紀)、ひっそりとした漁港で暮らす田沼久子(木村多江)。時代背景は1958年(昭和33年)の日本。結婚したばかりの妻を残し、夫が出張先の北陸で失踪。残された妻は唯一の手掛かりの2枚の写真をもってその後を追

い、北陸へ旅立ちます。行く先々で起こる殺人事件。そこで見たものは夫の隠された一面と、過去の出来事でした。この年末、松本清張ものがテレビでも放映します。12月21日は「火と汐」(TBS系で午後9時から、寺尾聡ほか出演)、12月29日は「顔」(NHKで午後9時から、谷原章介ほか出演)。あわせてどうぞ。

このシネマ

ガレージ

大阪の戦跡を歩く

第50歩

大阪空港  
(豊中市)



米軍接收時の空港



現在の大阪空港

大阪空港は1939年(昭和14年)に開港しました。延べ13700人の中学生が勤労動員で駆り出され、その後の拡張工事には多数の朝鮮人労働者が動員されたと言います。太平洋戦争中は軍用飛行場に転用されました。戦後はアメリカ軍が接收し、「イタミ・エア・ベース」(伊丹航空

基地)として戦闘爆撃機の発進基地になりました。1950年(昭和25年)の朝鮮戦争の時には、周辺に米軍宿舎が建ち並び、阪急電車の鉄道には米軍専用列車が走りました。蛍池から空港までの地域には多くの売春宿もできて、周辺は一大「米軍基地の町」と化していたそうです。

撰津  
河内  
和泉  
三國誌  
おおさか

51  
(大阪市中央区)

手塚治虫とマッチャマチ  
漫画家として  
デビューした伝説の地

今年、漫画家・手塚治虫さんの生誕80年でした。豊中市で生まれた手塚さんは、旧制北野中学校(現北野高校)で戦争中を過ごしました。暇さえあれば漫画を描いていた手塚さんは、学校に派遣されていた将校の目の敵にされ、「非国民」とのしられて竹刀で殴られることもありました。しかし美術教師から「どんなに厳しい時勢でも、漫画を描くだけはやめるな」と励ましを受けて描き続けました。「暗い時代、あの美術室は私たちの最後の砦(とりで)だった」と手塚さんは語っています。

戦後、手塚さんが漫画家としてのデビューを果たした場所が、現在の松屋町(マッチャマチ)です。終戦後の松屋町は、メンコやブリキ



手塚治虫さん



現在の松屋町

のおもちや、駄菓子屋を扱うバラックの間屋が建ち並び、リュックをかついだ商人が忙しげに行き交っていました。ここに当時大阪大学医学部の学生だった手塚さんが、授業が終わると角帽をベレー帽にかえて、漫画の原稿を手に通いました。行き先は当時「赤本」と呼ばれた少年向け漫画の出版社。「新宝島」「メトロポリス」のSFをはじめ、西部劇から時代劇まで、手塚さんの初期の作品数十冊がここから世に出ました。「赤本」は粗悪な紙の印刷でしたが、手塚さんの作品は、焼け跡の子どもたちに夢とロマンを与え、飛ぶように売れました。これで手塚さんは、漫画家のプロとして歩む決意を固めたと言います。

いまも心に響く  
名詩・名歌・名語録

短根の短根の まがりかど  
たき火だ たき火だ 落ち葉たき  
異 聖歌

「あたらうか あたらうよ 北風びいぶう 吹いている」と続きます。1941年(昭和16年)にNHK子どもテキストに掲載され、ラジオで放送されました。作詞者の巽聖歌(たつみせい)は、北原白秋に師事しました。この歌は戦時中には「火災の元になる」として軍の命令により放送禁止にされました。

子どもは子どもとして  
完成しているのだから  
大人の模倣ではない  
寺山 修司

詩人で演出家であった寺山修司(1935~1983)の言葉。毛虫と蝶が同じものであるはずがない。毛虫は毛虫として完成しており、蝶は蝶として完成している。人間だって同じことで、子どもは大人とは別個の個性をもった存在だ、という意味です。寺山は「書を捨てよ、町へ出よう」という有名な言葉で、1960年代の若者の心をひきつけました。